

2000年の誇りを未来へ
しらぬいこうえもん

「不知火光右衛門」顕彰会

大津町が生んだ横綱
不知火光右衛門の
名は、今も町の
人々の手によって
受け継がれています。



不知火光右衛門顕彰会
ほほのぶや
副会長 帆保 信也さん

不知火光右衛門顕彰会
さがふみお
会長 佐賀 文男さん

生誕2000年
受け継がれる思い

顕彰会インタビュー

不知火光右衛門顕彰会は、不知火光右衛門の功績を今に伝える活動を続けている。先日は、小学校の地域学習で光右衛門を紹介した。「そもそも相撲を見たことがない子どもが多いことに驚いた。だからこそ、知るきっかけをつくりたい」と会長の佐賀文男さん。「光右衛門の名を大津にしっかり根づかせたい」と語るのは、副会長の帆保信也さんだ。近年は郷土力士の台頭で相撲が再び注目される場面も増えている。地元の宝を、地元の手で守る。その思いが、顕彰会の活動を支える原動力になっている。

不知火光右衛門顕彰会

平成6（1994）年、大津町下町区有志が中心となって発足。区内の60歳以上の住民が会員で、現在は女性部を含めて約50人が所属する。顕彰会は、光右衛門の命月である2月に墓前祭を開き、神事のあとには手作りのちゃんこ鍋を振る舞うのが恒例。つつじ祭りや地藏祭りなど、町内の行事では展示や相撲甚句の披露を行い、地域に伝わる相撲文化の継承に力を注いでいる。また、町内の小学校にある土俵を清掃するなど、子どもたちが相撲に触れる環境を整えている。



声のせてふるさとを唄う
相撲甚句



二代目唄い手
ほきよのぶ
帆保 清信さん

不知火光右衛門顕彰会の活動では、町オリジナルの相撲甚句を唄っている。相撲甚句は、力士たちの世界で唄い継がれてきた七五調の囃子歌。民謡や詩吟に似ながらも、節回しや間の取り方に独特の味がある。

唄える限り、唄い続ける――

現在の唄い手は二代目・帆保清信さん。「歌がうまいだけではできない、奥の深い芸」と語る。独学で相撲甚句を学び、節ごとに不知火の名にふさわしい威厳と哀調を込める。イベントや祭りの舞台上で響くその声には、町の人々の誇りが宿る。「唄える限り唄い続けたい」帆保さんの声は、今も不知火の名を語り続ける。

相撲甚句「大津名所」の歌詞は町ホームページで見ることができます。



▲ホームページはこちら

大津町下町に
横綱がいた！



第11代横綱 不知火光右衛門とは？

第11代横綱

郷土が誇る横綱
大津町が生んだ第十一代横綱。土俵入りの「不知火型」の大成者で知られる。

力と美を備えた名力士
実力・品格・華麗さを併せ持ち「白鶴の翼を張れるがごとし」と称えられた。

次世代に道を開いた指導者
引退後は大阪で不知火部屋を創設。相撲界の発展に尽くした。

今も受け継がれる精神
顕彰会がその功績を語り継ぎ、町の誇りとして生きている。

不知火光右衛門のあゆみ

- 1825年**
現・大津町下町に生まれる（本名 原野 峰松）。草相撲で名を轟かせた祖父の血を引き優れた体力と力で他を圧倒。大阪で修行後、江戸へ上り、殿峰五郎の名で幕下入り。
- 1856年**
細川藩お抱え力士となり、翌年「不知火光右衛門」と改名。
- 1863年**
39歳で吉田司家より第十一代横綱免許を受ける。幕内在位27場所中、優勝3回。横綱として6年間在位。
- 1869年**
引退し、大阪で不知火部屋を創設。
- 1879年**
55歳で没。墓は大阪市と故郷・大津町下町に建つ。

阿蘇くまもと空港周辺こども相撲教室



11月2日、大津・菊陽・西原・益城の4町村が合同で開催した「阿蘇くまもと空港周辺こども相撲教室」。会場では、宇良関ら木瀬部屋の力士たちが、四股の踏み方やすり足を楽しく教え、笑い声が土俵に響いた。

その一角には、不知火光右衛門の展示も設けられた。大津町が生んだ横綱の名を伝えようと、顕彰会は町内外で活動が続いている。



展示物は
こちら

大津町歴史文化伝承館
(大津町大津1109番地)
開館時間：午前9時～午後5時
(最終入館午後4時半まで)
休館日：月曜日・年末年始
(12/29～1/3)
電話 096-293-4100
FAX 096-293-4101